

「死者たちは死んではない」⁽¹⁾

イルゼ アイヒンガーの散文「第四の門」について

島浦 一博

一 はじめに

イルゼ アイヒンガー (Ilse Aichinger 1921-) の散文「第四の門」 (Das vierte Tor) が「ウィナー クリーア」 (Wiener Kurier) 紙に掲載されたのは、第二次世界大戦が終わって間もない一九四五年九月一日のことだった。アイヒンガー 二十三歳、活字になった初めての作品である。それから長い時が流れ、再びこの散文に光を当てたのが、『イルゼ アイヒンガー ペーパーバック版全集八巻』の編纂を行ったりヒャルト ライヒェンスベルガー (Richard Reichensperger 1961-2004) であった。彼は全集の第一巻『もつと大いなる希望』 (Die größere Hoffnung) の巻末に、この散文を最初に掲載された時とほぼ同じ形で再録したのである⁽²⁾。その全集が出版されたのは一九九一年で、アイヒンガーが「第四の門」を発表してからすでに五十年近くの歳月が経過していた。それからさらに四半世紀、この散文について本格的に論じられたことはこれまでなかったように思われる。

アイヒンガーはこの「第四の門」を発表した直後から長編小説『もつと大いなる希望』に取りかかり、三年後の一九四八年に出版した。そのことから、この散文が小説の前身だと考えたくなるが、しかし原文で四ページほどしかないものを長編物の前身とみるのは少し無理があるだろう。とはいえ、アイヒンガーの文学世界を理解するうえで鍵となるモチーフが凝縮された形でちりばめられていることを考えると、「第四の門」は長編小説の前段階をなすものというより、むしろその中核をなすものと考えるのが妥当だと思われる。

本稿では、まず「第四の門」の全文を訳し、次にテクストの内容について若干の考察を試みたい。そしてこれらの作業を通じてアイヒンガーの文学世界への通路を探りたいと思う。

二 テクストの全訳

第四の門⁽³⁾

心にやましきでも抱えているかのように、トラムは猛スピードでその前を通過し、赤く輝きながら平らな大地の霞の中に消えていきます。だから、そこへ行くこととする人は第三の門で早々に下車して、背の低い塀に沿って足早に歩いて行くほかありません。第四があることなど忘れてしまった人々の好奇の目にさらされながら。その場所を訪れる人はめったにいないもので！この第四の門はどこへ続いているのでしょうか。

その賢い顔をした内気そうな子供たちに、さあ聞いてみてください、ほら、今 フープやボールやランドセルを背負って 一番後ろの乗降口から降りてきましたよ。子供たちはその熱い手に一輪の花も携えていません、それ

に死の神秘について注意深く教えてもらうために初めてここを訪れた子供たちのように、父親や母親やおおばさんに連れられているわけでもありません！ まさか そのことにあなたは少し衝撃を受け、興味をそそられて尋ねます。

「君たち、どこへ行くの」

「遊びに行くんだよ！」

「遊ぶですって！ 墓地なんかで？ どうして中央公園に行かないの」

「中央公園に入るのを、僕たち禁止されているんだ。公園の周囲をうろつくことさえもね」

「それを破つたら？」

「強制収容所行きさ」

小さな男の子がまじめな顔で平然と言い、持ってきたボールを輝く空に投げます。あなたはそっとして、突然心臓のあたりにかすかに締め付けられるような感覚を覚え、質問したことを後悔しそうになります！けれど、説明のでない何かに突き動かされて、どうしても会話をやめることができません。

「そう。じゃあ君たちは死んだ人のこと少しも怖くないの」

「死んだ人は僕たちに何もしないからね！」

あなたはもつと尋ねたいと思うでしょうが、あちらの角で、薄灰色の上下を着た男があなたのことをじつと見てゐるではありませんか。この子たちと一緒にいるところを見られるのは、あなたの不利益になりはしませんか。きつと、用心するに越したことはないと思いますよ！ そついつわけで、あなたは急いで別れを告げ、踵を返します。でもあなたはそんなことで、その胸苦しさからつまく逃れることができるのでしょうか……

このユダヤ人墓地にはジャスミンの花が咲いています、輝くばかりに白く落ち着き払い、きらきらした陽の光の中で香りのもやを放つて。すべてを投げ出して咲いています、そこには不安も憎しみもなく、一切の留保もなく、人情などという悲しい力も持たずに。誰にも手入れをもらえなくなつた灌木や観葉植物が墓を覆うようにはびこり、墓石にからみついて深く頭を垂れ、真昼の暖かさの中でかすかに震えています。それはまるで自分が雲散霧消した悲しみの証言者になることを自覚しているかのようです、言葉にできないほどの重く衝撃的な悲しみの、追放された者たちの悲しみの証言者になることを！ 草木はとどまることなく無秩序にぐんぐん伸びていきます、上海やシカゴやシドニーに亡命した人々が抱く郷愁のように、連行された人々の最後の希望のように、殺された人々の最後の溜息のように。そうしてこの陥没した墓丘を見るに見かねて覆い隠してやるのです。そんな草木のはびこつた崩れ落ちそうな墓石の下で死者たちは平然と眠っています。砂利を踏みしだく音も、草を刈り取る音も、遺族のすすり泣く声もめつたに聞かれることはありません。

そのずっと外れに、もう畑地と言つたほうがいいようなところに、ここ数年に亡くなつた人々が眠っています。死者たちは自分の生涯と切つても切れない生年月日と没年月日を掲げて、自分たちが悲嘆にくれて死んだことはブルーヘンヴァルトの骨壺の噂同様、絵空事ではないことを証明しています。

作業員の男が通り過ぎていきます、大きな黄色い星のついた青い作業着をむき出しの肩にかけ、両手にスコップを持ち、賢そうな顔に冷めた笑みを浮かべて。あなたに会つたら、彼はこう言つかもしれません。

「残念ながら、肌縫い付けるわけにはいかないんで！」

本来この星は、ほんのわずかの間でもはずすことが禁止されていますからね。

破壊されたセレモニール（モニュメント）の黒ずんだ大理石の上で、お日様が謎めいた動きをしています。しかし、ここの死者たちは本当に孤独なのでしょうか。　優しいそよ風が死者たちの上を震えながら撫でていき、小さな虫たちが灌木から灌木へよちよちと歩いて、遠くで機関車が悲しげな汽笛を長々と鳴らしてくれているではありませんか！　白い蝶がひらひらと畑から飛んできます。子供が甲高い声で歓声を上げ、また静かになります。本当に、ここの死者たちは見捨てられてしまったのでしょうか。

むしろ、波打つ草原を越え、焦がれる思いがいくつもの流れとなつて死者たちのほうへと押し寄せているのではありませんか。風が故郷であるこの最果ての孤島まで運んでくるのは、憎しみや検閲よりも強い、地球のあらゆる場所からの目に見えない燃え立つ愛の大波なのではありませんか。世界の鼓動がこの孤島を血で満たし、十分に温め、その内を流れることにより、生きている者たちの住処となつた場所　それがまさに、心を殺され縛られた街の外れにある、この見捨てられた最果ての墓地なのではありませんか。それどころか　世界自らが昔と同じ真昼の輝きのなかで、慈しむようにすべてを包みながら蟲を渡り、追放された子供たちの歓声のなかに自らの声を重ね、ジャスミンの香りのなかに自らが咲き、初夏の輝きのなかに自らの希望を含ませて、そして切り裂かれ散り散りになつた何百万という心を母の両手で抱き寄せ、祝福を与えてくれるのではありませんか。

でもあなたは言います。

「わたしには見えない！」

おお　だつたら、あちらの傾いた薄灰色の墓石の陰にでも隠れているんですね。

「君たちには、世界が見えるの」

それを聞いた子供たちは笑みを浮かべます、子供たちが笑みを浮かべるときは決まってそうするように、少し戸惑い、少しびつくりして、でもすっかり信じきった顔で。そしてこう言うでしょう。

「はい！」

今度はあなたが仰天する番です！

「でも、どうしてわたしには見えないの」

世界は、自分を愛してくれる者の前にしかその姿を現さないのです！

三年後、風の強い荒れた四月の夜闇のなか、最初の榴散弾が震えて固唾をのむ街の外れで閃光を放ち、短く弧を描いて、また暗闇のなかに消えていきました。

「あそこが前線だ！」

「どこ？ どの通り？ どの広場？」

屋上にのぼった数人が急に黙り込みます。みんな状況を把握しようとしているのです。そしてついに一人が沈黙を破ります。

「わからないけど だいたい 第四の門あたりじゃないかな！」

第四の門のあたり！そこは目には見えないけれど、世界が永らくそばにいて慰めてくれているところ、ジャスミンが思い焦がれて咲き、思い焦がれる子供たちが平和を夢見ていたところ、トラムが小さくて質素な終着駅すらつくろつとしかかったところ、そこは、自由の第一番目の駅。

三「第四の門」についての考察

散文のタイトルにもなっている第四の門は、あるユダヤ人墓地へと続く道の入り口に立っている。その地名はテクストには明示されないが、総合的にみて、オーストリアの首都ウィーンと考えてよいだろう。ユダヤ人墓地は、広大なウィーン中央墓地の果ての果てにある。そして時は、「強制収容所行きさ」、「薄灰色の上下を着た男があなたをじっと見ているのではありませんか」などの言葉からわかるように、ウィーンがナチスドイツの支配下にあった時代である。当時ユダヤ人は、中央公園に足を踏み入れることはもとより、ベンチに座ることさえ禁じられていた。そんななか、訪れる人などほとんどいないユダヤ人墓地はユダヤの子供たちの最後の遊び場であり、自由に振る舞える唯一の場所だったことだろう。一方、アイヒンガーは母方のみがユダヤ人であったため、ユダヤ人社会にも、ドイツ人社会にも受け入れられず、強制収容所行きは免れたものの、母方の祖母や叔父や叔母を失い、さまざまな非難、中傷、迫害を受けながら、最も多感な時期を戦時下のウィーンで過ごすことになった⁴。

この散文において、戦争を生き延びた若きアイヒンガーの眼差しがユダヤ人墓地に眠る死者たちに注がれていることは、誰の目にも明らかだ。初めての作品を発表するにあたって、彼女はどつしてもユダヤ人墓地のことを、その下に眠る死者たちのことを書かずにはいられなかった、限らない愛情をこめて。

「第四の門」は散文であるが、その表現がきわめて詩的なことに読者は気づかされるだろう。つまり、散文的表現と詩的表現の融合、それこそがアイヒンガーの文体の特徴であり、読者をひきつける魅力となっている。しかもその文章は高性能カメラを覗いているかのような精密さで描かれているのだ。例を一つ挙げよう。

「誰にも手入れをしてもらえなくなつた灌木や観葉植物が墓を覆うようにはびこり、墓石にからみついて深く頭を垂れ、真昼の暖かさの中でかすかに震えています。それはまるで自分が雲散霧消した悲しみの証言者になることを自覚しているかのようです、言葉にできないほど重く衝撃的な悲しみの、追放された者たちの悲しみの証言者になることを！」

この文章を読むと、前半の二行で対象をただ細かに描写し、後半部分でイマジネーションを詩的に表現しているようにみえるが、しかし本当にそうなのだろうか。確かに前半部分はユダヤ人墓地の様子を描写しているのだが、「深く頭を垂れ、真昼の暖かさの中でかすかに震えています」という言葉をよく読むと、それは植物の姿を客観的に表現しているというよりも、カメラでズームアップしてその小さな動きに見入り、そこに人のような感情を見出して、それを精密に書き写したように思えるのだ。一つの対象を精密に描き出そうとすると、物と人、客観と主観の区別が判然としなくなるのかもしれない。しかしいったんそのような目で見始めると、とたんに直前の風景まで違って見えてくる。「(草木が)墓を覆うようにはびこり、墓石にからみついて」という表現は、まるで人がその墓地をやさしく包み、墓石を慈しんでいるように感じられる。この文章に限らず、「第四の門」全体がそのような表現で埋め尽くされているのだ。アイヒンガーの鋭い観察眼と類いまれな感受性がそうさせるのである。

ところで、アイヒンガーが対象を描き出すとき、客観的でありつつも同時に主観的であるというのとはどういうことだろうか。この問いに正しく答えることは難しいが、一言でいえば、アイヒンガーの目に映る「現実」は一般常識的な「現実」とは少し異なっているということだ。アイヒンガーがわたしたちとは別の現実を見ているという意味では

ない。見ているものは同じであっても、ただアイヒンガーの場合、そこから受け取る情報量が圧倒的にわたしたちよりも多いのだ。それは作品に大きな魅力を生み出すが、しかし一方で理解を難しくしてしまう。

アイヒンガー作品は一般に難解だと言われるが、その要因の一つに、何気なく使われているようにみえる言葉がとてつもなく深く重い意味を担われている、ということがある。先ほどの引用の後半に使われている「証言者原文…Zeugen）」という言葉もそんな言葉の一つだ。小説『もつと大いなる希望』の第三章「聖なる地」のなかに、次のような一節がある。

「この道のどこで、かつて在った人たちは目覚めるのだろうか。どこで墓から頭をもたげ、僕らのために証言してくれるのだろうか。どこでその体から土くれをふり落とし、いつ僕らが僕らであると宣誓してくれるのだろうか。いつ、この嘲笑は終わるのだろうか。」

(…) いった僕らは再会し、いつ、かつて証言されていたことが証言されるのだろうか。いつ、僕らみんなのための天国宛のおおいなる証明書がかかれるのだろうか。」

証明書を持ってこられないユダヤ人は、強制収容所に送られてしまふ。墓場で遊ぶ子供たちは、いずれその日が訪れることを半ば予感しながらも、いつか自分たちのために証言してくれる人が現れるのを待ち望まずにはいられないのである。

また、アイヒンガーの作品のなかに繰り返し使われる言葉は、通常の意味とは異なり、アイヒンガー独自の思いが

込められていることが多い。このテキストで言えば、「焦がれる思い（原文：Sehnsucht）」「思い焦がれて（原文：sehnsüchtig）」がそうである。通常は「憧れ」と訳されることが多いが、アイヒンガーの場合は、憧れよりももっと切実な、激しい思いが込められているように思える。或いは「孤島（原文：Insel）」もそうだ。ここでは「孤島」と訳したが、通常は「島」と訳される言葉である。だがこれは訳語がどうのこうのといった問題ではなくて、Inselという言葉自体が、アイヒンガーにとって最も親密な場所、アイヒンガーの愛する故郷を示す特別な言葉であることに留意していただきたい。

四 おわりに

この散文は、第四の門に始まり、第四の門で終わる。最後の段落は、緊張状態が高まるなか、ついに戦闘が始まったことを告げている。しかしそれはまた、長い間眠っていた死者たちが再び目覚めたことに対する歓声のようにも思われる。アイヒンガーにとって、墓の下に眠る死者たちは死んではない。それに対して、生きて普通に生活を送っているからといって、必ずしも生きているとは言えないのだ。このことについてはまた別の機会に論じたいと思う。

このテキストに「あなた」というウィーン的一般市民らしき人物が登場するが、この者には子供たちに見える「世界（原文：die Welt）」が見えない。しかし見えないからといって、アイヒンガーはその人物を見下したりはしない。アイヒンガーの愛に満ちた眼差しは、ユダヤ人だけでなくそれ以外の人に対しても、たとえ敵対するような立場の人に対しても変わることはないのである。

「世界は、自分を愛してくれる者の前にしかその姿を現さないのです。」

アイヒンガーの文学世界への通路を探し求める者にとって、この言葉は戒めであり、また励ましのようにも思われるのだ。

注

- (1) この言葉は小説『もっと大いなる希望』のなかの一節であるが、アイヒンガーの文学世界にはこのような逆接的な表現が満ちている。アイヒンガーを理解するということとは、このような表現と格闘することに他ならない。
- (2) Ilse Aichinger: Die größere Hoffnung, Werke in 8 Bänden. Hg. von Richard Reichensperger. Band 1, Frankfurt am Main 1991, S.271, S.285.
- (3) Ilse Aichinger: Die größere Hoffnung, Werke in 8 Bänden. Hg. von Richard Reichensperger. Band 1, Frankfurt am Main 1991, S.272-275.
- (4) イルゼ アイヒンガー（真道杉 田中まり 訳）『縛られた男』（同学社）二〇〇一年 一九六頁
- (5) Ilse Aichinger: Die größere Hoffnung, Werke in 8 Bänden. Hg. von Richard Reichensperger. Band 1, Frankfurt am Main 1991, S.52. この訳文は、『もっと大いなる希望』の新訳を出版しちうぐなれている矢島さゆり氏に特別に許可を得て使用させていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

イルゼ・アイヒンガー（矢島 昴 訳）『より大きな希望』（月刊ペン社）一九八二年